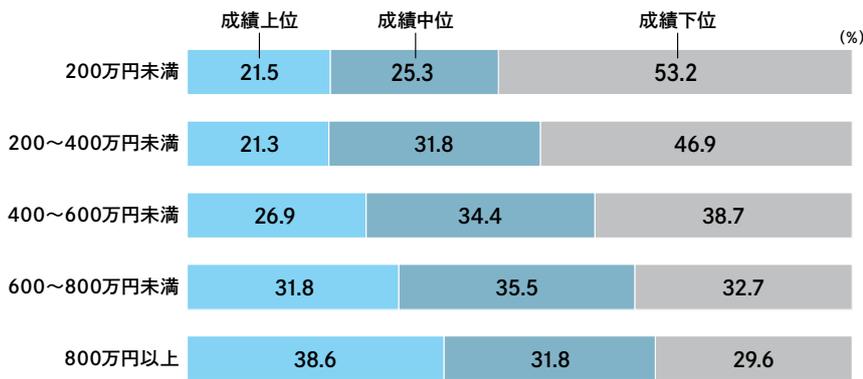


子どもの学びや成長に影響することとは？

今回取り上げるのは、小・中学生の生活と学びに関するデータです。特に、子どもの学びや将来への意識に、保護者のかかわり方や日ごろの経験がどのように関連しているかをデータでご紹介します。

1 世帯年収が下がるにつれて、「成績下位」が増加

図1 世帯年収別にみる子どもの学校の成績（小学4年生～中学3年生）



注1) 成績は、国語、算数・数学、理科、社会、英語（外国語）[小学生は英語（外国語）を除く4教科]について、それぞれ5段階で子どもに自己評価してもらったものを合計し、学校段階ごとに上位・中位・下位に3等分したものを、いずれかの教科に無回答・不明の人は除いている（図4も同様）。

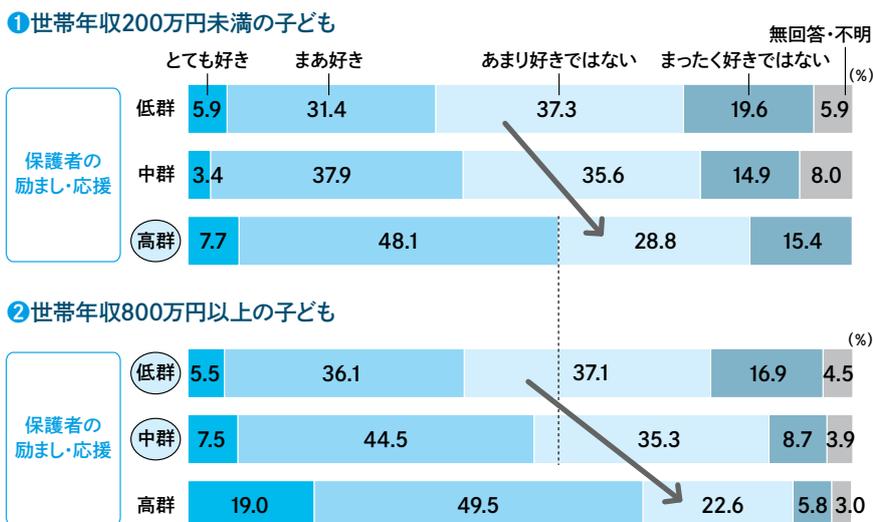
注2) 世帯年収は、保護者の回答。「答えたくない」、無回答・不明の人は除いている。

家庭の社会的背景（世帯年収、保護者の学歴・職業など）と子どもの学力との関係は、これまで多くの研究*で指摘されてきた。このような関係は今回の調査でも同様に見られ（図1）、家庭の世帯年収が低い子どもの方が「成績下位」の比率が高いという結果となった。この結果には、学校外の教育（習い事、学習塾、教材費など）にどれだけお金をかけられるかなどが影響していると思われる。

*例えば、文部科学省委託研究「平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」（国立大学法人お茶の水女子大学、2014年3月）では、家庭の社会的背景（SES）が高い子どもの方が各教科の平均正答率が高い傾向が見られたと分析している。

2 保護者の励まし・応援は、子どもの勉強の好き嫌いに影響

図2 保護者のかかわり別にみる子どもの勉強の好き嫌い（小学4年生～中学3年生／世帯年収別）



注1) 勉強の好き嫌いは、「あなたは（勉強）がどれくらい好きですか」と尋ねている（図3も同様）。「好き」（とても+まあ）の比率は、世帯年収200万円未満の子ども全体では43.5%、世帯年収800万円以上の子ども全体では56.2%。

注2) 保護者の励まし・応援は、お父さんやお母さんが「いいことをしたときにほめてくれる」「失敗したときにはげましてくれる」「やりたいことを応援してくれる」かどうかを、それぞれ4段階（とてもあてはまる～まったくあてはまらない）で子どもに回答してもらったものを合計し、高群・中群・低群に3等分したものを、いずれかに無回答・不明の人は除いている。

注3) 世帯年収が200万円以上～800万円未満の人、「答えたくない」、無回答・不明の人は除いている。

しかし、家庭の世帯年収だけが、子どもの成績や勉強への意識に大きく影響を及ぼしているわけではない。

図2①②を見ると、年収にかかわらず、保護者の励まし・応援を受けている子ども（高群）の方が「勉強が好き」（とても+まあ）の比率が高く、保護者の励まし・応援などの肯定的なかかわりは、子どもの勉強の好き嫌いに関連している。

また、図2の①と②を比べてみると、「勉強が好き」（とても+まあ）の比率は、世帯年収200万円未満の子どものうち、保護者の励まし・応援「高群」（55.8%）の方が、世帯年収800万円以上の「低群」（41.6%）、「中群」（52.0%）より高いことが分かる。

保護者の肯定的なかかわりは、世帯年収による子どもの学力格差を克服する手段となる可能性がある。

「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクト（親子パネル調査）の第1回調査（調査時期／2015年7～8月）。小学1年生～高校3年生の親子約2万1000組に調査し、子どもの成長のプロセスや成長に必要な環境・働きかけを明らかにする。今後、毎年調査を行う予定。

◎詳細は下記ウェブサイト（プロジェクトの進行状況）をご覧ください。
<http://berd.benesse.jp/special/childedu/>

ベネッセ教育総合研究所
 研究員

橋本尚美

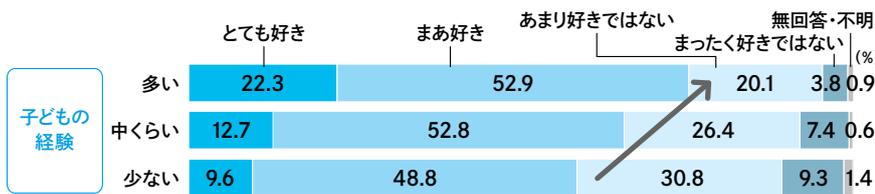
はしもと・なおみ

初等中等教育領域の子ども、保護者、教員を対象にした意識や実態の調査研究を担当。子どもの文化世界や学びの実態、子どもの成長環境としての社会・学校などに関心を持っている。



3 多様な経験が子どもの学びや成長を促す

図3 子どもの経験量別にみる勉強の好き嫌い（小学4～6年生）



日ごろの経験が勉強や意識に影響

子どもの日ごろの「行動」面の経験も、子どもの成績や意識と関連するようだ。

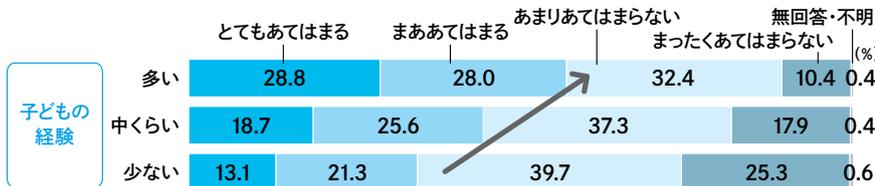
図3（小学生データ）を見ると、家で季節の行事をする、自然の中で思いっきり遊ぶ、小さい子どもの世話をする、無理だと思うようなことに挑戦するなど、日ごろの経験が「多い」子ども（75.2%）の方が、「少ない」子ども（58.4%）に比べて、「勉強が好き」（とても+まあ）の比率は高い。小学生のうちに多様な経験をして、勉強が好き、楽しいといった意識を高めておくことは大切だろう。

また、図4、5（中学生データ）を見ると、日ごろの経験は、成績や将来への意識とも関連しており、「将来の目標がはっきりしている」（とてもあてはまる+まああてはまる）と回答した比率は、経験が「少ない」子どもが34.4%であるのに対して、「多い」子どもは56.8%である。中学生においても、日ごろの経験が大切であることを示している。

図4 子どもの経験量別にみる学校の成績（中学生）



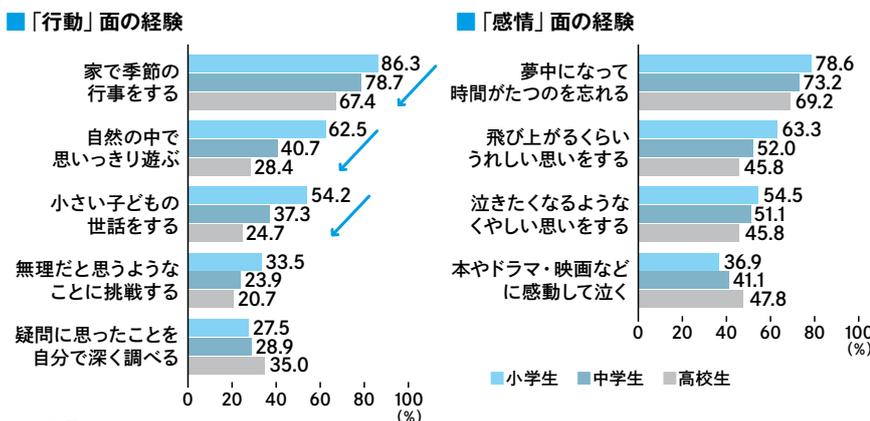
図5 子どもの経験量別にみる「将来の目標がはっきりしている」かどうか（中学生）



注1) 子どもの経験は、この1年くらいの「行動」面の経験（家で季節の行事をする、自然の中で思いっきり遊ぶ、美術館や博物館に行く、地域の行事に参加する、小さい子どもの世話をする、疑問に思ったことを自分で深く調べる、無理だと思うようなことに挑戦するなど14項目）の有無について、子どもに複数回答で回答してもらったものを合計し、学校段階ごとに多い・中くらい・少ないに3等分したもの（図3～5）。

注2) 「将来の目標がはっきりしている」かどうかは、子どもに「あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか」と尋ねている（図5）。

図6 学校段階による子どもの経験率の変化（小学4年生～高校3年生）



注) 複数回答。

肯定的なかかわりを促す努力を

このような日ごろの経験の多くは、学校段階が上がるにつれて減少する傾向にあるため（図6）、小・中学生のうちに様々な経験をさせておきたい。「行動」面だけでなく、「感情」面の経験も、子どもの成長を促す重要な要素だろう。

また、保護者や周囲の大人の肯定的なかかわりや、子どもに多様な経験を促すことは、子どもの学びに向かう力や学力に大きな影響を与えることができる。教育委員会や学校は、子どもに対するこのような保護者や周囲の大人のかかわりをサポートしていくことが大切だろう。